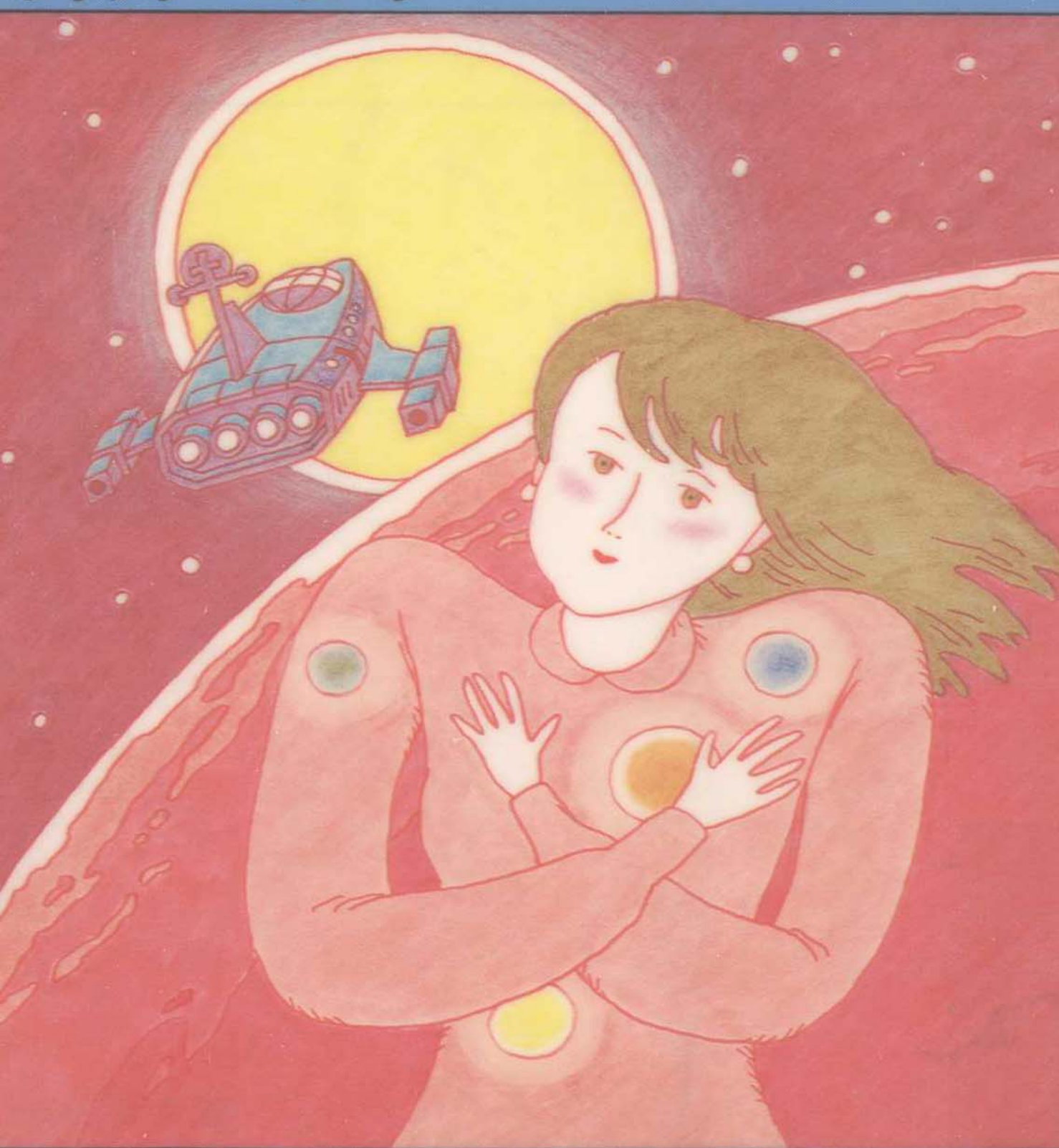


COBALT-SERIES

SFファンタジー

あたしの中の....

新井 素子



集英社文庫

財団法人日本科学協会

— あら

昭和35

回奇想天外新人賞』に佳作入選。高校3年の時、奇想天外社より『あたしの中の……』を上梓。コバルトシリーズに「いつか猫になる日まで」「星へ行く船」「通りすがりのレディ」「カレンダー・ガール」「ブラックキャット」がある。立教大学文学部卒業。特技、迷子になること。趣味、絵を描くこと、お菓子作り、泳ぐこと。



あたしの中の……

COBALT-SERIES

1981年9月15日 第1刷発行
1991年2月10日 第55刷発行

★定価はカバーに表示してあります

著 者 新 井 素 子

発行者 若 菜 正

発行所 株式会社 集 英 社

〒101-50

東京都千代田区一ツ橋2-5-10

(3230) 6268(編集)
電話 東京 (3230) 6393(販売)
(3230) 6080(製作)

印刷所 大日本印刷株式会社

© MOTOKO ARAI 1981

本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。

落丁・乱丁の本はご面倒でも小社製作課宛にお送りください。送料は小社負担でお取り替えいたします。



COBALT-SERIES

あたしの中の

新井素子

集英社文庫

目次

あたしの中の.....	5
ずれ.....	69
大きな壁の中と外.....	95
チューリップさん物語.....	207
あとがき.....	214
解説.....	224

カット／長尾
治

あ
た
し
の
中
の
・
・
・
・
・
・

「次の満月まであと三日」

山道を走るバスの中。あたしはそう呟くとゆっくりのびをした。火曜日の午後二時、時間のせいだかバスの乗客はあたしをいれて二人しかない。

「さてあと三日間、どうやってつぶそうかな」

ふっと自分の言ったことのおかしさに気がつく。莫迦ですね、あたしや。これから三日間、あたしは地球連合軍とかいうのに命を狙われることになるんだっけ。時間をつぶすのなんだのって言うている場合じゃないんだ。

『いずれにせよ、あたし達を殺すことは彼らにはできないのよ』ルナの台詞を思い出す。

『ただ、このチャンスのをがすと、また二十九日と半、待たなくちゃならないもの。あなただって早く帰りたいでしょ』はいはい、判ってますってんだ、ルナちゃんよ。心の中でそう呟くと、後部座席へ目を転じた。そこにはバスのもう一人の乗客、昨日からあたしを尾けまわしている男がいるのだ。一旦はうまくまいたと思ったのに、いつの間にかまたあたしを尾けている……。彼は一番うしろの席にすわっていて、あたしはわざとらしく一番前にすわってやった。

彼はあたしの敵なのかしら。目をつむって考えてみる。奴らの手先か単なる好奇心か。いずれにせよ、尾け回されるのは好ましい事態ではない。あれは秘密裡に行なわねばならないのだから。

そんなことを考えていると。とたんに強烈な勢いでバスがバウンドした。運転手の上体が大きくしなつて、フロントガラスに衝突しそうになる。まただ。あたしはあわてて運転手を抱きとめた。そして、重力の変化。落下感。やだ、バスったら崖から落っこちてるじゃない。ええい、どうしよう？　なんて本当は考える間もなく、あたしの体は勝手に行動をおこしていた。運転手を左わきにかかえて、あたしは窓から飛び出した。この時ふと、あたしを尾け回していた男のことを思い出したが、もうどうしようもない。とにかくあたしは右手でなんとか松の木の枝をつかんだ……と思う間もなく、枝はあえなく折れて、あたし達は再び落下。体勢をたて直すひまもありやしない。鈍い嫌な音と共にあたし達は地面に激突した。

「あーあ、まただわ。どうしてこう人間の体つつうのは、やわに出来てるんだろぅねえ」

あたしは運転手をそつと地面においてやり——幸い彼は腕とあばら骨を数本折っただけで済んだようだ——自分の体を見回した。

頭から落ちたのが悪かったんだろぅ、頭蓋骨ずがいこつは見事に陥没かんぼつしちゃってるし、首すじから胸にかけてざっくり切れてて大出血。どうも頸動脈けいどうみやくをぶった切っちゃったらしい。

「出血大サービスって奴だな、まさに」

比較的新品のピンクのブラウスと、こちらは使いふるしのスカートが両方共血でびしょびしょ。これじゃ街なかに出られやしない。

「ん？」

上を向いたあたしはあわてて身をふせる。確かに人かげが見えた。奴らだ。あたしの体中の血が逆流した。——もっともすでに何リットルだか流れでてるみたいだから、逆流しようにも絶対量が少なすぎるかも知れないが。

あたしが助けてやった運転手は奴らの同胞である筈だ。あたしを尾けてた男もそうだ。あたし一人を殺す為に、なんで同胞まで殺しちゃうんだろう。

「ごめんね運転手さん、迷惑かけて」

あたしは呟いた。

「しかしあいつらも莫迦よねえ。あたしは死なないってこと判ってるくせに」

とたんに。まったくとたんに、激烈な痛みが頭部を走った。あたしは思わずうめく。ついで、悲鳴をあげた。痛い。ぱんって音たてて脳がふつとぶんじやないかと思う程、痛い。

——嫌だ。

頭の中に最大のポリウムで声がひびく。これ、ひょっとして精神感応？

——俺はまだ死にたくない。

頭痛はいよいよ激しくなった。そして、それにつれて声はさらに大きくなる。これ何よ。

あたしはうすれてゆく意識の下で自問した。

なんでこうなっちゃったんだろう。何か、どこかで手違いがあつたに違いない。今まで体のどの部分がどう破壊されても、気絶なんて醜態^{しゆうたい}、さらしたことはないのに。それとも奴らは超能力者を使

ったんだろうか。まさか……。奴らの精神力では、このあたしに精神攻撃をかけるなんて、できる筈が……。

……そして暗黒。まっ暗闇。

☆

「とにかく奇妙なんですよ。脳波がどうにも変なんです」

耳許で声がしたので目が醒めた。ただ、意識ははっきりしたものの、どうにもこうにもまぶたがあかない。

「変ってどんな風にです……」

「やたら妙に波うつちゃって、こんなケース、見たこともないんです」

こんな会話を聞きながら、あたしはまぶたと格闘していた。これ、本当にあたしの体なんだろう。まぶたは二トンづみトラック並みに重いし、他の部分たるや、論外。

「あー」

医者らしい人の声のトーンが急にか変わった。

「見て下さい。脳波が急におかしく——いえ、まともになりました」

急にあたしの体は楽になった。ので、あたしは目をあけた。

「あ、気がつきましたか？」

あたしは弱々しくうなづく。どうにもこうにも体力を消耗しきっちゃったみたい。

部屋には三人の男性がいた。一人は白衣を着ていたから、まあ常識的に考えると医者さん。一

もおじさんって感じの人。

まずおじさんって感じの人が口火をきった。

「具合は……大丈夫ですか」

「ええ、まあ……」

あたしは笑ってみせる。どうも状況がよく判んない。なんであたしは、こんなとこに寝てるんだろう。あの三人は誰だろう……。

「しかし幸運でした」

お医者さんが言う。

「あの崖から転落して助かるなんて」

「あの……あたし、崖から落っこったんですか？」

あたしはだんだん不安になってきた。どうも連中の言ってることがよく判んない。

「あなた、おそらく気絶していたんでしょう。だから判んないんですよ。あなたが乗ったバスは十メートル位ある崖から落っこちたんですよ」

「バ……ス？」

あたしはあいかわらずきょとんとしていた。バスって何のバス？ どこへ行くバス？

——とたんに。まったくとたんにあたしの頭の中におそろしい疑問がわいてきた。あたしは誰だろう？ 単語がうかぶ。記憶喪失^{きおくそうしつ}。何？ 記憶喪失だあ？ 冗談じゃない。なんであたしが記憶

失わなきゃならんのだ。でも現実にあたしにはあたしが誰だか判らないんだし、世間的一般的常識ではこれを記憶喪失って言うんだから、つまるところあたしは記憶喪失なんだろう。

「何一人でぶつぶつ言ってるんだ？」

鋭い声がした。見上げるとスリーピース。

「自分が何したか覚えてないってわけでもあるまいに」

「何をしたかって……あたし、何か悪いことしましたか？」

「何か悪いこと、だって。嫌です、秋野さん、この娘、しらばっくれちゃって」

「山崎君、そりゃ君の悪いくせだよ。まだ彼女は犯人と断定されたわけじゃないんだから、そういう口のきき方をしちゃあ……」

このおじさんとスリーピース、警察関係者なんだろうか。で、あたし、容疑者？

「田崎さん、別に我々はあなたがあのバス事故を起こした、と言っているわけじゃないんですよ」

秋野さん、とかいうおじさんがやさしい口調で言う。

「ただ状況から見ると、あなたが何らかの意味でこの事件に関係していると疑われても仕方ない処があるんです」

何のことだかさっぱり判りやしない。大体さっきはバス事故だと言っておきながら、今のくちぶりじゃ、墜落事故を装った犯罪みたいに聞こえるじゃない。

「田崎京子、聞いてんのか？」

「田崎京子……って、あたしのこと？」

あたしはごくなにげなく——なんせ記憶が無いんだから——この台詞^{せりふ}を口にしたんだけど、その時の山崎氏——スリーピースのことね——と秋野さんとお医者様の顔したらなかった。秋野さんはぎょっとしたようにあたしを見つめ、山崎氏はあたしにつかみかかりそんな風情^{ふぜい}を示し、何故^{なぜ}かお医者様はうれしそうな顔をした。そしてその後で三人は同時に口をきいたんだけど、同時に台詞は書けないから、秋野さん、山崎さん、お医者様の順で書いとくね。

「何だって？ 本当に判らないのかね？」

「おい、いいかげんにしろよ」

「そうでしょう、そうじゃなきゃいけませんよ」

「えっ？」

最後の「えっ？」は、あたしと秋野さんと山崎氏が同時に出した声。だってこのお医者様、いかにもあたしが記憶を失ったのは当然、って感じのこと言うんだもん。

「笹原^{ささはら}先生、それどういことですか」

秋野さんがそう言ったところを見ると、このお医者様は笹原と言うらしい。

「だって秋野警部。崖から墜落して炎上しちゃったバスに乗ってて、かすり傷一つおってないっていうのは、あんまりおかしいですよ。他の二人は重傷と即死。言わせてもらえりゃ、重傷程度で済^すんだのがそもそも奇跡で、かすり傷一つ無いなんてお化けですよ」

日本って国では、運よくバス事故で助かると、お化けかバス事故を装った犯罪の犯人にされちまうんだろらか。

「とにかく、やっと彼女も記憶喪失という、ひとなみの故障を示してくれたんですよ。これは彼女の人間性からみると、実にめでたいことではないでしょうか」

なにがめでたいもんか。あたしゃ頭にきた。

「ひどいわよ、あんまり。運よくバスの転落事故から助かっただけで、バスの転落事故の犯人だけの化物だの……」

「ちつともひどかない」

山崎氏、青すじをたてておこってる。

「一回や二回の事故なら幸運ってこともあるだろうけど……一週間たらずのうちに二十九回も事故に遇いやがってからに……」

「ええ!？」

……山崎氏の言うことを書きだすと次のようになる。

水曜日午後一時。いところと一緒に墓まいりに行きバス事故に遇う。いところあたしのみ無傷、のこり十九名死亡。

木曜日午前八時。登校中大型トラックにはねられ、何故か無傷。

同日午前八時十九分。登校中、上から降ってきた鉄材の下敷になる。無傷。

同日午後四時五十六分。下校中の電車が脱線。下りだったのでほとんど客がいなかったのが幸いだったが、二十九名重軽傷。一番ひどい筈の位置にいたあたしだけ無傷。

……中略。

火曜日午後二時。鹿谷行バスが崖から転落。乗客はあたしをまぜて二人しかいなかったが、あたし以外の一名、即死。運転手はあばら骨を折ったくらいで済んだ。が、あたしは無傷。ただし、あたしのブラウスには血がべつとりついていていた。

山崎氏、秋野警部の意見はこうだ。

一人の人間がこうもしつこく短期間に事故に遇うのは、あまりに不自然だ。で、最初は、誰かあたしに恨みをもつ者の犯行かと思っただけ。ところが。あたしは常に無傷なのだ。おまけに今回などは、無傷のくせに血をべつとり服につけている。これはどう解釈したらいいんだろう。一つ、あたしの治療能力が超異様である。二つ、犯人側にはあたしを殺す意志は無く、単におどかすだけの犯行。三つ、犯人はあたしで、あたしは性格異常者で、自分から事故に喰いついてゆき、服をやぶき、用意してきた血のりをふりまいている。

「で、あんた方は三つめの説が正しいと思ってるわけね」

刑事二人に向かってあんた方ってのは、あんまりいい口のきき方じゃないだろうけど、この際、そんなことにかまってられない。

「いや、別にそこまで言ってるわけじゃあ……」

秋野さんはさすがに油茶を濁したが、山崎の野郎はいけしゃあしゃあとこう言った。

「そう思ってる。いや、それじゃどうもあんたが気違いみたいに聞てくるけど……裏に何かおそろしい意図があるに違いない」

「そんなこと、ないわよ」

「記憶を失った筈の人間が何言うんだい」

「あたしに限ってそんなことない。あたしが保証するわよ」

「とにかく、あんたが二十九回ぶっ続けて無傷っていうのは絶対おかしい。それに、あんたの記憶喪失ってのもただけじゃないし」

「ただけない、なんて言われたって困っちゃう。こっちだって好きで記憶無くしたわけじゃないんだから。」

「いずれにしろ、あんたを森村一郎殺しもりむらいちろうの下手人げしゅたんとして、ひっくくってやるからな」
また知らない名前が出てきた。

「誰、それ。その森村一郎って人」

「あんたが殺した男だよ。忘れたわけじゃあるまいに……いや、記憶が無いんだっけ。……秋野さん、殺人犯人って記憶無くしてもちゃんと死刑か無期になりますよね。あー といつ未成年だから死刑にも無期にもならねえのか、畜生」

一人で興奮している。彼、これで本当に刑事が勤まるんだろうか。——なんてこっちも落ち着いちゃいられない。大体、今度は殺人犯人ときたもんだ。化物、バス転落事故擬装犯人、ついに殺人犯にまでされちゃった。

「森村一郎って誰なの」

あたしは苛々いらいらしてまた同じことを繰り返す。

「バス事故で即死した乗客」